동아시아학
东亚学科
OF EAST ASIA

熊本学園大学外国語学部東アジア学科

2023年９月１日発行
バックナンバー

News Letter

第 35 号

■ 巻頭言

熊本学園大学外国語学部教授
外国語学部長　塩入　すみ
（日本語教育）

長いコロナ禍を経て出口も見え始め、東アジア学科の韓国・台湾の研修が再開した。皆、オンラインでは経験できない学びがあったはずだ。その一つに、コミュニケーションの距離がある。日本人は会話での対人距離が長いので有名だが、宴席での距離は逆に短い。それは伝統的な宴席の机の形・配置に表れている。日本ではお膳が上座から下座に細長く並び、会話は主に両隣の人とだけ、短い距離で局部的に進行するのに対し、台湾や中国の宴席は円卓が基本で、会話は全員で放射線状に長距離で進む。円卓の全ての人と眼を合わせてグラスを上げ、微笑みながら会話に参加するのは、日本人には難しい。亡き恩師は台湾での宴の進み方に感心し「台湾の人は大人ですね」と呟いていた。円卓の宴はその場の全ての人が楽しむことを配慮した大人な(sophisticated)コミュニケーションの場である。この夏の研修を経て、皆少し大人になっただろうか。

台湾師範大学で海外研修中の学生たち

□■学科の最新ニュース！
東アジア学科の授業風景やニュースなどを学科ホームページで配信しています。QR コードよりご覧ください。

ソウルの聖公会大学校で海外研修中の学生たち

□ 研究紹介――学問分野としての台湾史

東アジア学科准教授　田上　智宜（台湾地域研究）

先日、台湾の中央研究院において台湾史研究所設立 30 周年を記念する式典が行われた。中央研究院というのは総統府に直属する台湾で最も権威のある学術機関であり、32 の研究所・研究センターを擁している。中央研究院が設立されたのは中華民国政府が南京にあった 1928 年であり、100 年近い歴史を持っている。それを考えると、台湾史研究所はまだ 30 年に過ぎず、中央研究院のなかでは比較的新しくできた組織であることが分かるだろう。

これは、台湾史という研究分野が確立されたのが割と最近になってからであるということに起因する。もちろん以前から台湾の歴史に関係する研究に取り組む研究者はいたが、それらが１つの研究分野になっていたとは言い難かった。それは日本だけでなく、台湾においても同様の状況であった。そのため、1990 年代になってようやく中央研究院をはじめ、台湾の各大学に台湾史を専門とする研究・教育組織が作られるようになった。

日本の状況はともかくとして、台湾における台湾史研究が研究分野として成立していなかったということは意外に感じられるかもしれない。台湾では 1987 年に戒厳令が解除されそこから民主化が進んでいくが、それ以前には政府（いわゆる国府）は中国全体を代表しているという建前を堅持していた。そのような政治的状況は、学術研究に対しても大きな影響を及ぼしていた。当時の中華民国政府の歴史観に基づくと、台湾はあくまで中国のなかの１つの地方に過ぎず、台湾史は全く重視されていなかった。

台湾を歴史的に主体性を持つ領域として位置付け、先史時代から第二次世界大戦後に至るまでの歴史をまとめた初期の著作として、史明『台湾人四百年史』がある。これも日本に亡命していた著者によるものであり、民主化以前の台湾では禁書であった。かつての台湾では、台湾史研究は単に軽視されていたにとどまらず、国家の一体性に疑問を提起する危険な存在とみなされていた。この史明という人物もまた、東京の池袋で中華料理屋を営みながら、その２階で台湾独立運動に勤しんでいた人物である。

それでは、日本における台湾史研究はどうであろうか。日本の学術界においてもかつては台湾史研究、ある

いは歴史以外も含めた台湾研究全体が今よりずっと軽視されていた。そのため、当時の関係者はだいぶ肩身の狭い思いをしてきたらしい。いわく、台湾研究をするというのは即ち「反動」であるというレッテルを貼られてしまうと。自由な学術活動が保障されているはずの日本でも、地域研究、特に東アジアを対象とする研究はイデオロギー対立の影響を強く受けていたのだ。

■ 「出張日記」

東アジア学科准教授　土井　浩嗣（朝鮮史）

日韓交流の代表例として、講義で朝鮮通信使を取り上げていることもあり、あれこれ調べていたところ、実家に程近い大阪市西区の竹林寺にその足跡が残されていると知り訪れることにした。竹林寺は、阪神なんば線の九条駅から北東に徒歩 10 分弱、松島公園のそばにある。かつてここは淀川の河口に当たり歓楽街として賑わった所だが、今はごく普通の大阪の下町である。

さて、この竹林寺には 1764 年の通信使の小童・金漢重の墓がある。金漢重は厳寒の瀬戸内海を航海中、暴風雨にあって重病となり、大坂に着くや床に伏してしまう。そこで、天満の漢方医らが駆けつけ、竹林寺に移して看病することにした。病床で故郷に残した二人の子供を想う金漢重の姿を見た人々は、街中の子供の中から年恰好のよく似た二人を選び、彼の側に座らせた。二人の子供を見て金漢重は微笑んだが、その様を見て人々は深く同情したという。やがて死期を悟った金漢重は、辞世の句を残し 2 月に死去するが、哀れに思った住職は、彼のために念仏を百万回唱えたといわれる。

現在、金漢重の墓は、本堂の裏に一般の墓と並んでひっそりとたたずんでいる。悲しい交流の歴史ではあるが、その軌跡は今も大切に守られている。

□ 東アジアへのまなざし

東アジア学科特任准教授　金　美連（比較教育学）

格差問題や少子高齢化など、日韓が抱える社会問題には多くの共通点がある。そのような問題が認知され、言語化され、時に言葉が借用されることもあるが、その過程において両国間でタイムラグが生じる。

例えば、「引きこもり」や「いじめ」といった言葉は日本から韓国にわたり、そのまま使われていたが、いつからか「隠遁型独りぼっち(은둔형외톨이)」、「集団嫌がらせ(왕따)」という新しい韓国語が生まれ、幅広く使われるようになった。また、韓国では親の経済力によって運命が決まるという「スプーン階級論」が流行り、「金のスプーン（裕福な家庭に生まれた子）」という言葉が定着したが、数年前にそれを翻訳した際に適切な日本語が見つからず、長々と説明したことがある。しかし、最近では日本でも「親ガチャ」という言葉が流行語となった。

近年、韓国では女性の社会進出が目覚ましく、ジェンダー間の対立が社会現象となっている。その中で、男性が女性を攻撃する言葉として「ママ虫（맘충）」や「キムチ女（김치녀）」のような女性を見下すような言葉が生まれた。日本でも今後、女性の一層の社会進出が待たれるところではあるが、はたして「納豆女」といった言葉が現れる日がくるのだろうか。

■ 映画紹介　『さらば、わが愛　覇王別姫』陳凱歌監督、1993

「第五世代監督」と呼ばれた陳凱歌監督の代表作、『さらば、わが愛／覇王別姫』（1993）が公開 30 周年及び主演張国栄（レスリー・チャン）の没後 20 年企画として一部の劇場で再上映されている。

京劇の演目「覇王別姫」の覇王・項羽を演じる武生（武人役）の段小楼と、虞美人役の旦（女形）である程蝶衣は、少年時代からともに京劇養成所で厳しい稽古を受け、人気役者として名声を博する。程蝶衣は兄貴分の段小楼を深く愛すが、段は菊仙と結婚し、嫉妬に苦しむようになる。段小楼と程蝶衣、そして菊仙の愛憎関係が、民国期・日中戦争・文化大革命という動乱、そして人民共和国の成立とともに移り変わっていく様が描かれている。

ご存知の方も多いと思うが、「覇王別姫」とは京劇の人気演目で、漢の劉邦との戦に敗れた楚の覇王・項羽と虞美人の哀話を描いたものだ。前漢の司馬遷の『史記』「項羽本紀」が初出であり、垓下の戦い・四面楚歌・虞美人の自刎・項羽の最期という見せ場がつづく。

原作は、香港の女性作家・李碧華の小説『覇王別姫』(1993)である。文学批評家、藤井省三は原作を映画とは違い人民共和国の成立後は一切が容赦なく破壊されてしまう、というテーマが明確に語られていると高く評価し、『さらば、わが愛／覇王別姫』を、第五世代監督がもつ批判精神を喪失して世界的な映画商業主義、オリエンタリズムに傾斜した作品だと批評する。

確かに、映画では欧米社会の観衆を念頭に置いたいわばシノワズリーが圧倒的な映像美によって描きだされている。やはり第五世代の監督である張芸謀の『紅夢』にも、そうしたオリエンタリズム的傾斜は顕著である。

東アジア学科准教授　小笠原　淳（中国現代文学）

発行者　熊本学園大学外国語学部東アジア学科　編集人　小笠原　淳（東アジア学科長）
〒860 - 8680　熊本市中央区大江 2－5－1　Tel 096-364-5161（代表）